

---

## 宮城県では2日前に地震が起きていた

(久志本成樹・監修 石巻赤十字病院、気仙沼市立病院、東北大学病院が救った命、東京、アスペクト、2011、p.9-23) 2011/11-08

---

### 2日前の津波は60センチだった

東日本大震災の2日前、宮城県沖海域では三陸沖でマグニチュード7.3の地震が起こっていた。このときも津波の第一波を宮城県の海岸で観測しているが、それは最大で60センチの津波であった。宮城県は、地震が多い地域として知られている。政府の地震調査委員会は「10年以内に宮城県沖地震の起こる可能性を70%程度、30年以内の可能性は99%」と2010年に予想していた。宮城県ではもちろん宮城県沖地震への対策は講じており、宮城県民はほかの地域の住人よりも、おそらく地震に対する意識は高かったはずである。

2011年3月11日14時46分、宮城県三陸沖、牡鹿半島の東南東約130キロ、深さ24キロの地点で、マグニチュード9.0の巨大地震が発生する。宮城県栗原市で最大震度7、宮城県、福島県、茨城県、栃木県の4県28市町村で震度6強を観測したほか、東北地方を中心に、北海道から九州まで、地震が観測された。これは世界の地震の歴史の中でも歴代4位となる規模だった。それまで日本人が頭に浮かべる大地震といえば、1997年の阪神・大震災だった。しかし甚大な被害を出した阪神淡路大震災ですら、マグニチュードは7.3である。

### 日本じゅうが津波を同時体験した

地震そのものの被害は少なかったが、過去に類を見ない津波が起きた。第一波はたいしたことはなかったが、第二波は10メートルを超える津波となり、東日本の海岸全域に押し寄せた。地震から時間がたってからの津波だったため、テレビで生中継されたり避難した人が携帯電話で録画したりと、日本じゅうが津波を同時体験する感覚に襲われた。これまで津波の

被害については、個人の記憶や文字による記憶は残されているが、映像では残っていなかったのである。

### **津波による死亡者の予測は、存在しない**

37.1年に1度、宮城県沖地震は起こっていたが、前回の地震では津波の被害はほとんどなかった。2004年3月の『宮城県地震被害想定調査に関する報告書』では、津波による死亡者数の予測は書かれていない。県としても津波に重きを置いた災害対策は作ってこなかった。たとえば石巻市の避難所マップを見ると、避難所は、津波浸水予想域の外に作られていた。しかし、東日本大震災ではその避難所も浸水した。予想を超えた津波が襲っていたのである。しかし津波の被害予想は必要ない、想像を超えるものであれば役にたたないと言うわけではない。宮城県沖地震の対策があったから、その記憶が被災地に残っていたから、対応できた部分は大きかったということをおぼろげに忘れてはいけない。

### **海岸線が変わるほどの津波が襲ってきた**

巨大津波は、東日本の海岸線の地図を書きかえるほどの被害を出した。7月28日時点で全国で死者数が1万6103人、行方不明者4764人、重軽傷者5877人。なかでも宮城県は全体の7割を占める甚大な被害を受けてしまった。日本列島は4つのプレートが重なるところに位置しており、どこで巨大地震が起こってもおかしくない立地である。日本に住むだれもが被災者になりえるのである。避難時にケガをしたり、避難所で伝染病に感染する可能性もある。そのとき助けてくれるのはまず「医療」である。地震の規模も、津波の大きさも、すべてが想定外とされた東日本大震災。その被災の最前線で、医師たちは医療システムを構築し、体系化し、多くの命を救っていったのである。